

# 宇宙船地球号と人類のためのSDGs

## Spaceship Earth and SDGs for the mankind

嵯山女学園大学教育学部 学部長・教授

宇土 泰寛

Yasuhiro Uto

はじめに

日本からアフリカへの旅は、地球の広大さと自然風土の多様性をジェット機の機上からでも垣間見させてくれる。西アフリカのブルキナファソへの旅は、シベリアの針葉樹林に覆われた大地を越え、緑の田園が広がるフランスのパリへ、そこで、乗り換えて、一路南へと飛ぶ。やがて真っ青な地中海が現れ、ついにアフリカ大陸を望む。まず見えたのが、アトラス山脈の山頂の雪である。アフリカとの出会いが雪とは驚いたが、すぐに何時間飛んでも広がるサハラ砂漠である。窓から砂漠を見続けると砂漠でも様々な表情を見せる。きれいな砂漠のエリアもあれば、岩砂漠のようなところも、川の流れだったワジも見せる。突然、窓に黄色い砂が舞い上がってくる。砂嵐ハルマッタンである。高度1万メートルという高い所まで砂塵が舞い上がるのかと驚きである。突然緑の木が見える。赤茶けた砂漠の中の小さなオアシスが見え、人間のかかわりが感じられる。そして、だんだんと人間の住めそうな大地に変わり、緑の線が見えた。川である。ニジェール川である。

ニジェールの首都ニアメは、滑走路一本で誘導路もない。ここで、大半の乗客は降りた。この乗客は、中国人である。隣の席の中国人は、大学を卒業し、アフリカの奥地で、携帯

電話の電波塔をつくるとのことだった。ブルキナファソは、当時台湾と国交を結んでいたもので、中華人民共和国の人々はブルキナファソには入れないのである。飛行機は、再び飛び立ち、乗客も少なく客室乗務員も一気にローカル線らしい暇そうにくつろいだ様子になりながら、一路ブルキナファソへと向かった。砂漠から人々が住むエリアへの境はわからないが、水の得られそうな地形に沿って、少しずつ人家が増えていく。夕方近くになって首都ワガドゥグーに着陸したのである。

飛行機の上空から、地表を見ることができるようになった現在、地球環境の多様性、脆弱性も感じることもできる。ただ、多くの乗客にとって、サハラ砂漠を5時間見続けることはない。機内の映画を見ている乗客が大半である。また、東アフリカのタンザニアに行ったとき、西アフリカのブルキナファソは距離的には近くても、飛行機では遠く、パリからの便が最も便利であった。今回乗った飛行機も、アフリカ行きだから、アフリカやヨーロッパの人が多くかと思いきや中国の人が大勢乗っていた。ここにも、歴史が関わり、世界の政治状況、経済状況が如実に現れている。

今一度、私たち現生人類、ホモ・サピエンス誕生の地、アフリカから、人類にとっての地球と現代世界が抱えている課題SDGs（持

続可能な開発のための目標）を教育の視点から考えてみたい。

## 1. 地球の誕生と人類のあゆみ

46億年前に、太陽系は誕生し、原始太陽系星雲をつくっていたガスやちりは、やがて微惑星となり、それらが衝突し合い、次第に惑星に成長していった。太陽系第3惑星である地球も原始地球として誕生したのである。

原始地球には、たくさんの微惑星が衝突し、原始地球の成分が蒸発し、原始大気になっていった。すると一層温度が上昇し、地表全体をマグマ（溶岩）が覆うマグマの海が形成されたのである。次第に地球表面は冷えてくると、やむことのない大量の雨が地上に降り注ぎ、海ができた。海には様々な物質が溶け込み、そこから生命が誕生し、ゆっくりと進化していった。中でも、私の研究室には、ミニ博物館として地球の歴史を小さな具体物で展示している。その最初の展示が、35億年前のストロマトライトの化石である。このストロマトライトは酸素をつくり、大気中に大量の酸素を放出したのである。海の中では、生物の爆発的な進化が始まっていた。そして、生物は陸上へと進出した。植物は、大型化し、荒れた大地に「緑」が広がり、3億年前のころの石炭紀には大森林も形成された。動物も、魚類から両生類、そして、恐竜に代表される爬虫類へと進化していった。中生代に大繁栄し、巨大化した恐竜たちの中に、哺乳類は誕生し、ひっそりと暮らしたのである。

恐竜の絶滅により、哺乳類が新生代の主角として登場し、高い適応能力を示し、地球上に広がっていったのである。その中で、類人猿の登場、人類の誕生と進化していったので

ある。

ホモ・エレクトス、ホモ・ハビリス、そして、ネアンデルタール人、現生人類であるホモ・サピエンスと連なるのである。

私たち、ホモ・サピエンスは、約20万年前、アフリカで誕生し、その時、人類は共通の言語を持ち、共通の文化も持っていた。その後、アフリカを出てアジアの西端地域に入った。そこから一つのグループは南東方向に進み、海岸に沿ってどんどん先に進んでいった。もう一つのグループは、西に向かいヨーロッパに入っていった。南東に進んだグループは、インドを経て、東南アジアに達し、さらに一部のグループは勇敢にも氷河期のために狭くなっていた海峡を利用し舟で海を越えてオーストラリアに入った。5万年も前のことである。そして、彼らがアボリジニーと呼ばれる最初のオーストラリア人になった。西に進んだグループはヨーロッパに生活の場を確保し、さらに一部は、ユーラシア大陸をはるか東アジアにまで進んでいった。日本列島に入るには、北方からの人々は極寒の地を越えて、日本列島に入った。南方から来た人々は、流れの速い黒潮を越えて達したのである。さらに残りは当時陸続きになっていたベーリング海を歩いて渡って南北アメリカ大陸全体に散っていった。ホモ・サピエンスは、このように道具を発達させ、極寒の地にも、大海原を越えて新たな地にも渡り、地球全体へと拡散していったのである。

そこで氷河期は終わり、地球は温かくなって海面が上昇し、大陸間は再び遠くなり互いに孤立する。それから長い間、各大陸の人々はそれぞれの地域の環境に合うように進化しそれぞれ独自の文化を発達させていったので

ある。

## 2. 人類と世界一周

人類のあゆみへと続く歴史の中で、常にその母体となったのは地球である。しかし、人類にとって、地球は大きすぎ、無限の広さをもった空間であった。この地球を意識し始めるのは、コペルニクスによる天動説から地動説への転換、そして、大航海時代の帆船による探検と新航路の発見である。

人類が地球を意識し、人類にとって、丸い地球を味わったのは、この大航海時代である。まずバルトロメウ＝ディアスが喜望峰に達し、ヴァスコ＝ダ＝ガマは喜望峰を回り、アラブ人の水先案内で、1498年にインドのカリカットに到着したのである。この航海によって、大西洋とインド洋が直接つながることになった。また、天文学者トスカネリの地球球体説を信じたコロンブスは、1492年に西回りにアジアをめざしたが、サンサルバドル島（現在のバハマ諸島の島）に到着したのである。そして、マゼランの船隊が人類最初の世界一周を1522年に成し遂げたのである。しかし、一般の人々にとって、地球は遠い存在であり、丸い地球も実感できるものではなかった。一般の人々にとって、世界一周の旅をすることが可能となるには、長い年月が必要であった。

そのきっかけになったのが、科学技術の発展である。その土台となった産業革命は、18世紀後半にイギリスで始まり、19世紀に欧米へ波及した。まず木綿工業から始まり、ワットの蒸気機関による動力革命、フルトンの蒸気船、スティーブンソンの蒸気機関車の交通革命へとつながったのである。この蒸気

機関の普及により、「化石燃料の時代がはじまった。1700年に年間300万トンだった石炭の生産は、1850年に6000万トンと20倍に増加している。」<sup>1)</sup>という事実は、現在の地球の抱える問題の発端にもなるのである。これは、産業革命による経済的欲求と活動は、都市への人口の集中と原料生産地との交通網の拡大と時間の短縮へとますます連なっていったのである。そして、地球は、まだ開発されるべき土地と未知なる場所が広大に広がる空間であるという認識のもとに、この交通機関の発達によって、多くの人々が移民として、大陸を越えて、アメリカやオーストラリアなどに渡り、アメリカの西部開拓、オーストラリアの開拓などを行ったのである。しかし、そこには、その開拓の中で、先住民の人々と新しく来た移民の人々の対立、土地争いが生じたのである。西部劇の映画では、ヨーロッパ移民の幌馬車隊とネイティブインディアンとの襲撃、そこに騎兵隊が登場というストーリーのイメージが強いが、たくさんの西部劇の映画を見てみると、大牧場主と小農民の対立などヨーロッパ移民同士の争いも多いのである。

19世紀は、移動手段が飛躍的に発展し、多くの人々が国境を越えて移動できるようになり、グローバル化が始まった時代と言える。更に、アメリカ大陸横断鉄道が1869年5月に開通し、スエズ運河がレセップスによって1869年に開通した。この開通によって、イギリスとインド、東南アジア、東アジア間は大幅に短縮されたのである。

このような時代を背景に、1873年に、ジュール・ヴェルヌは、『八十日間世界一周』を出版した。ヴェルヌの世界一周は、ロンド

ンに住むフィリアス・フォッグと言う紳士が、トランプ仲間と1秒でも遅れると全財産を失うという賭けをして、世界一周の旅に出た小説である。この旅の途中で様々な事件やドラマが引き起こされながら、ロンドンからパリ、スエズ、インドのボンベイ、カルカタ、シンガポール、香港、上海、横浜、サンフランシスコ、シカゴ、ニューヨーク、イギリスのリヴァプールの港に到着し、ロンドンに帰ってくるのである。

このヴェルヌの小説を実際に実現させたのが、ニューヨークで記者として活躍していた二人の女性である。一人は、ワールド紙の記者ネリー・ブライとコスモポリタン紙のエリザベス・ビズランドである。ネリーは、アメリカ・ニュージャージーから大西洋を渡ってイギリスへ、フェリーでフランスへ、イタリア・プリンディジから蒸気船でスエズ運河へ、コロombo、シンガポール、香港、横浜、太平洋を渡り、サンフランシスコへ、大陸横断鉄道で、ニューヨークへと東回りルートで一周したのである。これに対して、エリザベスは、ニューヨークから大陸横断鉄道で、サンフランシスコへ、蒸気船で太平洋を渡り、横浜へ、東シナ海を横断して、香港、シンガポール、コロombo、スエズ運河、地中海、イタリア、鉄道でフランス、そして、イギリス、アイルランドから大西洋を渡ってニューヨークへと西回りで一周したのである。

この旅からもわかるように、蒸気船と鉄道のネットワークが広がってきて、この交通網を使って、大量の移民がヨーロッパから世界に渡ることが可能となったのである。まさに一部の探検家による冒険の時代から一般の人々の旅行の時代に移り、エリザベスが日本

に寄り、その美しさに感嘆したように、地球上の多様性が映し出されるとともに、大英帝国などの植民地での支配関係やそこでの階級社会も明確になってきたのである。

### 3. 地球意識の誕生と地球の危機

地球意識は、どのような契機や歴史的背景をもって形成されてきたのだろうか。

1980年代に盛んに使われた「国際化」や「国際」の言葉が変わって、1990年代になると、日本においては、「地球」を使った言葉が多く使用されるようになり、21世紀に入ると、頻繁にマスメディアでも地球のメッセージが表現されるようになった。

そのために、この「地球」意識は、簡単に生まれてきたように思われがちである。しかし、これまでに見てきたように、地球誕生の奇跡ともいえる壮大なドラマを知ることにより、人類の長い歴史の中で次第につくられてきたものである。2050年代を視野に入れることが必要になった現在、人類の未来を創るために必要不可欠な時代認識となったのである。フランスの思想家エドガール・モラン(Edgar Morin)<sup>2)</sup>は、「地球時代は、地球が惑星の一つに他ならないという事実の発見と、この惑星上の各地点間の交流によってスタートする。」と言う。コペルニクスによる天動説から地動説への転換と、新旧大陸の相互交流によって始まり、さらに長い歴史の中で、いろいろな退行や無自覚な過ちを繰り返しながらも、20世紀後半になって、地球意識が形成されはじめたと述べている。

地球意識が形成される契機になっている要因について考察してみたい。

まず、地球規模での相互依存関係は、モノ・

カネ・ヒト・情報などが国境を越えるグローバル化を著しく進展させ、日常生活における食料から衣服、生活用品など、多くの外国産に支えられて生活している。また、インターネットなど高度情報化・マルチメディア社会、そして、超スマート社会の出現は、情報における世界的距離を消滅させている。更に、ジェット旅客機など交通手段の発達、ヒトの地球規模での移動を容易にし、近年、国境を越えたヒトの交流や移動がますます増大している。これは、19世紀の世界一周の可能性を広げた近代科学や技術がますます発展し、その時間的距離を短縮しているということである。

しかし、この近代科学は、人類にとってプラスに働いただけではない。地球意識は、核戦争の脅威からも生まれてきているとも言えるのである。それは第二次世界大戦終結後の世界の動きと関係している。

国連のユネスコが、国家主義への深い反省から、「世界市民性教育 (Education in World Citizenship)」、「世界共同社会に生活するための教育 (Education for Living in a World Community)」<sup>3)</sup>を提示したにもかかわらず、その後、東西冷戦時代へと突入し、このアメリカ合衆国とソビエト連邦による東西対立は、人類絶滅の可能性を創り出した核の恐怖に地球上を陥れたのである。同時に、核廃絶への民衆の運動を世界的に引き起こした。また、核の問題は、核爆弾や核実験の問題だけではなく、平和利用とされる原子力発電の問題をも地球的規模での問題として意識させるようになった。特に、1979年3月のスリーマイル島原発事故 (アメリカ合衆国) や1986年4月のチェルノブイリ原発事故 (ソ

連)、そして、2011年3月の福島原発事故は、核爆弾ではなくとも、国を越えて、大きな被害をもたらし、世界の人々の反原発運動を引き起こした。このように、「核時代という世界的規模での人類の生存が問われる時代」<sup>4)</sup>は、地球意識形成の重要な要素になったのである。

更に、国家の意識を越え、地球意識を高めたのが、環境問題である。この問題は、現在に至ってもますます世界的な課題となっている。

この環境問題を世界全体に自覚化させたのが、アメリカのレイチェル・カーソン女史の『沈黙の春』である。これは、地球の自然保護と化学公害追求の先駆的な役割を担ったのである。

「春がきたが、沈黙の春だった。いつもだったら、コマドリ、スグロマネシツグミ、ハト、カケス、ミソサザイの鳴き声で春の夜は明ける。だが、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地 —みな黙りこくっている。」<sup>5)</sup>「私たちは、いまや分かれ道にいる。この分かれ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守る、最後の、唯一のチャンスがあるといえよう。」<sup>6)</sup>これは、1962年に、現代の地球生態系の問題をいち早く取り上げた本として、アメリカで出版されたのである。

更に、地球的課題を明確に示したのが、ローマクラブの報告である。このクラブは、世界中で学生運動や公害反対運動などが頻発し、高まった1968年に発足し、様々な分野の人々が人類や地球の未来を考えるために集まったクラブである。そこでは、グローバルで、長期的な視点と複合的で全体的な視点を持ちながら、地球社会に対する以下のような報告を



次々と出しているのである。

まず、世界中で注目されたのが、1972年に出版されたローマクラブの報告書『成長の限界』であり、人口、食糧、資源等の地球的問題を地球の有限性との関係で警告している。そして、1991年には、The First Global Revolution（日本語訳『第一次地球革命』）を出版し、「我々は、この小さな星をまるで破壊しようと心に決めたかのように酷使している。山積する地球規模の問題群を解決する力は、国家にはない。科学技術の発展で、人類は生存の条件を改善する大きな可能性を手に入れた。しかし、我々は、知識は増えたが、知恵に乏しく、生存と持続性への鍵を求めて模索している。唯一の望みがあるとすれば、人類に降りかかる危機に対して人々が共通の認識を深め、その共通の利害を踏まえて、一致して行動をおこす事である。」と、地球市民としての連帯を訴えているのである。<sup>7)</sup>

世界中の人々に、具体的な姿として、地球を示し、地球意識を広めたのが、アメリカ合衆国のアポロ計画である。アポロ計画は、アメリカ航空宇宙局（NASA）による人類初の月への有人宇宙飛行計画である。アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディの演説通りに実現させた計画であり、1968年、アポロ8号は、地球の周回軌道を離れて、初めて宇宙に浮かぶ地球の姿を人類に見せてくれたのである。ニューヨーク・タイムズは、人類が初めて目にした地球の自画像を一面で取り上げ、「永遠の静けさの中に浮かんだ、小さく青く美しい地球。人類はついにそのありのままの姿を見た。」「その結果、私たちはその地球に乗り合わせた兄弟であることを知った。」と結んだ。そして、アポロ11号で、船

長ニール・アームストロングは、史上はじめて地球以外の天体に降り立ったのである。その時の言葉「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」と残している。この後のアポロ13号は機械船での爆発事故で危機的状況の中で地球に帰還した。1972年の17号で、最後の月面着陸をなして、アポロ計画は終了したのである。

このアポロ計画は、宇宙をめぐるアメリカ合衆国とソビエト連邦の激しい競争の中で、ソ連に先を越された結果でもあった。ソ連は、1957年、初の人工衛星スプートニク1号を打ち上げ、1961年には、ボストーク1号で、ユーリ・ガガーリンが有人宇宙飛行に成功し、人類史上初めて地球を外から見て、「地球は青かった」という名言を残したのである。このために、アメリカ合衆国は、国家の威信をかけて、アポロ計画を遂行したのである。

このように様々な契機や歴史的背景を持ちながら、地球意識が広まっていったのである。

#### 4. 宇宙船地球号としての地球との出会い

この地球意識の誕生と広がりとともに、21世紀の地球時代を生きる人類にとっての地球観・世界観を表す象徴的な概念が生まれた。それが、「宇宙船地球号（Spaceship Earth）」である。宇宙に浮かぶ青く輝く地球をひとつの宇宙船とみなし、地球上で生きる私たち人類は、この同じ宇宙船の乗組員であるとする概念である。

この概念は、1960年代から70年代にかけての時代背景と関わりながら、創られ広がったのである。その主な人物は、経済学者のケ

ネス・E・ボールディング (Kenneth E. Boulding) と建築家であり、思想家のバックミンスター・フラー (R. Buckminster Fuller) である。

ボールディングは、1965年に「宇宙船としての地球 (Earth as a Space ship)」を書き、1966年にワシントンで開かれた未来資源研究所で、「来るべき宇宙船地球号の経済学 (The Economics of Coming Spaceship Earth)」という論文<sup>8)</sup>を発表した。ボールディングは、「カウボーイ経済」から「宇宙飛行士経済」への転換を提起したのである。つまり、人間がこの地上に出現して以来、辺境のようなものが存在し、人々が居住していた場所が悪化した場合、別の場所に移動することができた。しかし、材料を好きなだけ取ってきたり、好きなだけ捨てたりできるような無限の貯蔵所がある開かれた地球から、貯蔵所を持たない一つの宇宙船としての閉じた地球への移行が必要と述べたのである。まさにエコロジカルな経済活動への先駆けと言える。

バックミンスター・フラーは、『宇宙船地球号 操縦マニュアル (Operating Manual for Spaceship Earth)』<sup>9)</sup>において、化石燃料や原子力エネルギーに依存することへの警告とエネルギー供給母船「太陽号」などのクリーンエネルギーへの移行を提示している。

このように1960年代後半には、バーバラ・ウォード『宇宙船地球号』の出版や1965年世界で初めて宇宙遊泳に成功したソビエト連邦の宇宙飛行士アレクセイ・A・レオノフも、「地球は、全人類が乗組員になっている宇宙船」だと語るなど、地球意識の形成が明確になってきたのである。

## 5. SDGs (持続可能な開発目標) と地球の未来への教育

「宇宙船地球号」概念が提示されてから、50年を経ている。地球への危機を訴えたローマクラブの報告からも半世紀も経っている。この半世紀の間で、問題は解決されたのか、地球的な規模での問題や危機的状況は更に深刻な事態になっている。50年に一度と言われる異常気象が頻発したのが2018年の夏だった。更に、このままの事態が続けば、地球規模での異常気象が続くと予想されるのである。

このような状況まで、人類は何をなしてきたのだろうか。振り返ってみたい。

1972年にストックホルムで開催された第1回国連人間環境会議が開かれ、「オンリー・ワン・アース (Only One Earth)」を合言葉に、「人間環境宣言」を採択し、UNEP (国連環境計画、本部ナイロビ) を創設した。この会議は、政治的・国家的レベルでの大きな変革であり、その後の地球的視点からの環境問題への取り組みと結びついていった。1975年に国際環境教育ワークショップ (ベオグラード憲章)、1977年に環境教育政府間会議 (トビリシ宣言) と世界的な動きがあり、環境問題への関心と環境教育が重視されるようになった。

この環境問題へのアプローチともう一つのアプローチが、1974年のユネスコ勧告と国際教育からのアプローチである。

1974年11月、第18回ユネスコ総会において、「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」 (Education for International Understanding, Co-operation

and Peace and Education relating to Human Rights and Fundamental Freedoms) が採択され、これが「国際教育」と称されるようになったのである。

その教育政策の指導原則をみても、次のような項目になっている。

1. すべての段階及び形態の教育に国際的側面と世界的視点をもたせること
2. すべての民族、その文化、文明、価値及び生活様式（国内の民族文化及び他国民の文化を含む）に対する理解と尊重
3. 諸民族及び諸国民の間に世界的な相互依存関係が増大していることの認識
4. 他の人々と交信する能力
5. 権利を知るだけでなく、個人、社会集団及び国家にはそれぞれ相互に負うべき義務があることを知ること
6. 国際的な連帯及び協力についての理解
7. 個人が、自分の属する社会、国家及び世界全体の諸問題の解決に参加する用意を持つこと

この国際教育への74年ユネスコ勧告は、日本における国際理解教育の実践において、現在でもその基本的理念が使われていることでわかるように、世界に大きな影響を与えたのである。

そして、環境教育、国際教育等の流れを踏まえて、ついに、1992年6月に、国連環境開発会議（地球サミット）がリオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）で開催された。ここでは、持続可能性（Sustainable Development）が議論され、「気候変動枠組み条約」「生物多様性条約」への署名、「環境と開発に関するリオ宣言」とその具体的な行動計画「アジェンダ21」が採択されたのである。この地球サ

ミットは、182ヶ国が参加し、歴史的な会議になったのである。

1997年には、日本の京都で、「地球温暖化防止京都会議」（気候変動に関する国際連合枠組み条約締約国会議）が開かれた。

2002年に南アフリカ共和国で開催された地球サミット（ヨハネスブルグ・サミット）で、リオの地球サミットで合意されたSD（持続可能な開発）概念は、より教育とのつながりを持ったESD（Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育）として、日本より提案され、2005年から2014年まで世界全体で実施することになったのである。なんと、2014年11月10日～12日、世界の中から愛知が選ばれ、ESDに関するユネスコ世界会議が名古屋の国際会議場で開催され、そこで、あいち・なごや宣言が発せられたのである。

そして、2015年9月に開催された国連持続可能な開発サミットで、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。このアジェンダは、ミレニアム開発目標（MDGs : Millennium Development Goals）の後継として、図1のように、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発



図1 持続可能な開発目標（SDGs）

出所：国連広報センター



目標 (SDGs)」を掲げている。

MDGsが、主に、開発途上国のための目標であったのに対して、SDGsは、先進国自身も国内で取り組むべき課題も含んでいるのである。その一つが、2016年末にパリで開かれた国連の気候変動会議COP21で、温暖化対策の国際的枠組み「パリ協定」が採択されたのである。そこでは、気候変動教育 (Climate Change Education) の必要性が提起されている。

この活動の一環として、椋山女学園大学教育学部宇土ゼミを中心とした大陸間水・気候変動教育プロジェクトは、椋山人間学研究センターとも連携しながら、2019年3月に、日本、ブルキナファソ、フランスの子どもたちによるパリ協定をめざすパリ公演を実施するのである。

#### おわりに

人類と地球のかかわりについて、46億年の歴史を見ても、奇跡としか言いようのない太陽系第3惑星の地球の歴史である。そして、この地球上のあらゆるところで生活している人類の歩みである。しかし、人類は、その特性を活かしながら進歩し、道具の発明から、科学技術の発展による近代社会を形成してきた。その土台に、教育がある。生活の豊かさ、便利さを求めてきた人々の個々の行為、価値観は、地球全体に対して何をもたらしたか、今、人々の目の前に、異常気象や様々な社会の変化として現出してきている。より多く、より速く、より豊かにと欲望を追い求めてきた人々を生み出してきた近代教育自体が問われているのである。ここに、再び「宇宙船地球号」の意識形成を図る必然性が出てきてい

るのである。

日本でも、1990年に「宇宙船地球号プログラム」<sup>10)</sup>の実践研究がなされ、90年代後半の地球市民教育やグローバル教育等の展開へと連なった。

更に、ICTの進歩はすさまじく、宇宙船地球号の乗組員として、自らの地域(ローカル)の問題を探究し、国境を越え、大陸を越えて、それらを提示し合い、地球的課題、グローバル 이슈を協働しながら解決を目指すことが可能となってきた。

愛・地球博を開催し、生物多様性条約のCOP10、そして、ESDの最終年世界会議を開催した名古屋は、世界の地球的課題に挑戦している都市なのである。

そして、ユネスコ世界会議と同時に開かれていた子ども会議で、ユネスコスクールになった椋山女学園大学附属小学校<sup>11)</sup>の児童が代表として、世界の各国の閣僚が列席している前で、子ども宣言を発表したのである。この附属小学校の玄関には、パリのユネスコ本部から承認されたユネスコスクールの看板があると同時に玄関の床に、世界への方位盤が埋められている。そこには、世界の動向とつながる都市が刻まれている。北東は、国連本部のあるニューヨーク、東は地球サミットの開かれたリオ・デ・ジャネイロ、南は椋山が国際交流をしているシドニーとパース、西はESDが提案されたヨハネスブルグ、北西は椋小が交流しているアフリカのブルキナファソ、そして、ユネスコの本部のあるパリである。

椋山女学園大学附属小学校の新校舎の大階段に光を注いでいる天井は、設計時の校長であった私の要望を取り入れて、イメージを具

体化したものである。そのイメージは、「宇宙船」である。また、1階の広いホールの名前、「フレンドシップホール」は、2010年に地球の未来社会を対立から多文化共生社会へと子どもたちの力で作るアニメ映画「ヒックとドラゴン」の映画監督が楢小に来校された時に監督から直にいただいた名前である。そして、子どもたちは、新校舎と校庭を結ぶ橋の名前を「みらい橋」と名付けた。楢山女学園の「にんげん橋」「のぞみ橋」に続く第3の橋は、地球誕生から未来へと続く人類の歩みを引き継いでくれることと思う。

この豊かな人間性と未来志向の精神を教育学部でも引き継いで、未来を創っていく卒業生を育てていきたいと願っている。

#### 参考文献

- 1) 田近英一監修 2012『地球・生命の大進化』新星出版社
- 2) リチャード・フォーティ 渡辺政隆訳 2003『生命40億年全史』草思社
- 3) ナヤン・チャンダ 友田錫、滝上広水訳 2009『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ 上下』NTT出版
- 4) 高野一良 2013『アメリカン・フロンティアの原風景』風濤社
- 5) クリスティアン・ウォルマー 安原和見、須川綾子訳 2012『世界鉄道史 血と鉄と金の世界変革』河出書房新社
- 6) ジュール・ヴェルヌ 鈴木啓二訳 2001『八十日間世界一周』岩波文庫
- 7) マシュー・グッドマン 金原瑞人、井上里訳 2013『ヴェルヌの「八十日間世

界一周」に挑む 4万5千キロを競ったふたりの女性記者』柏書房

#### 注

- 1) 宮崎正勝 2015『「空間」から読み解く世界史』p. 202 新潮社
- 2) エドガール・モラン 菊地昌実訳 1993『祖国地球』法政大学出版局 p. 8
- 3) 永井滋郎 1989『国際理解教育 地球的な協力のために』第一学習社 p.34
- 4) 中村平八「核時代の世界と日本」古城利明編 1990『世界社会のイメージと現実』東京大学出版会 p.56
- 5) レイチェル・カーソン 青樹築一訳 1974『沈黙の春』新潮社 p.12  
Rachel Carson 1962 *SILENT SPRING* Fawcett World Library
- 6) レイチェル・カーソン 前掲書 p. 322
- 7) アレキサンダー・キング、ベルトラン・シュナイダー 田草川弘訳 1992『第一次地球革命』朝日新聞社 pp. 191-2
- 8) ケネス・E・ボールディング 公文俊平訳 (1975)『経済学を超えて』改訳版 学習研究社
- 9) バックミンスター・フラー、芹沢高志訳 (2000)『宇宙船地球号 操縦マニュアル』筑摩書房 ちくま学芸文庫
- 10) 宇土泰寛 2000『地球号の子どもたち 宇宙船地球号と地球子ども教室』創友社
- 11) 宇土泰寛 2013「宇宙船地球号 水と生活」楢山女学園大学 中部日本教育文化社